

個展「Reverso」に際して

## 「FLUID BABY」・「Repetition」シリーズおよび周辺の制作を起点に、21世紀における古典絵画鑑賞体験の「ずれ」とイメージの流通についての雑考

久木田大地

### 現代における古典絵画の流通について

本テキストは、2025年12月6日（土）から12月21日（日）にかけて日本橋のmyheirloom galleryで開催される個展「Reverso」に際して、古典絵画を受容する環境が制作当初とは大きく変容した今日、それをめぐって形成された（あるいはされつつある）現代特有の美意識をピックアップして考察すると共に、自身の3年間の制作に現れる諸要素の来歴を探り、それらが社会構造にもたらしうる作用についてを検討するものである。

前者については、特にマーケティングのスペクタクルに巻き込まれる形で日常へ流通する古典絵画のイメージを取り扱う。ユニクロとルーヴル美術館によるコラボレーション、ルイヴィトンとジェフクーンズが手がけた「MASTERS」コレクションなどが顕著であるが、古典絵画が挿入された雑誌の表紙、美術館のミュージアムショップや街の雑貨店で出回るポストカードやエコバッグ、クリアファイルなどのグッズも地続きの現象であると捉えている。本来はその一回性によって権威や高尚さ<sup>31</sup>が担保されていた絵画が半ば暴力的にトリミングされ七色にレタッチされながら街に並べられる様子はとても興味深い。

マスターピースの数々が印刷されたグッズの存在を知ったあとからオリジナルの絵画を肉眼で鑑賞した場合、鑑賞体験の「ずれ」のようなものが起きるのではないか。そのような問いを立てた。オリジナルの絵画でなくとも画集やインターネット上の画像を鑑賞する際にもそれは発生し、それもまた唯一存在する絵画実物の認識に対して干渉が起きるはずである。その「ずれ」について、具体例を想定しながら説明を試みたい。

また、自身の制作の共通点としてその「ずれ」について働きかけているという点が挙げられる。初めはそれらを意図的に設計していた訳ではなく、現在においても直感的な要素構築が先立つ形で作品を立ち上げている。それでも、個人の判断基準や感性は何を見聞きして過ごしてきたかという対外的な経験に基づくものであり、ひいてはその時代と場所、社会構造から与えられたものであるから、自然と先述の諸現象とリンクすることが多い。蓋然性があり、古典絵画をめぐる諸現象に対する応答として捉えられるのではないかと自身では考えている。

※1 ドイツの社会学者ヴァルター・ベンヤミンは『写真小史』（1931）や『複製技術時代における芸術作品』（1936）において、この「いま・ここ」という一回性に基づいた来歴的価値や重みづけをアウラと呼称し、複製技術の発展によってコピーがオリジナルのそれを剥ぎ取っていくことを、またそれによる社会への影響についてを言及した。

### 鑑賞体験の「ずれ」について

たとえば、レオナルド・ダ・ヴィンチが制作した『モナリザ』はルネサンスに花開いた技術力の結晶として何世紀も昔から保存され続け「二度と同じ物が再現されることはないであろう」とその高尚さが認められている。その権威は長きにわたる評価の積み重なりであり、伝聞による価値の合意形成であると言える。各人はその価値の合意形成を内面化することで、有り難がり、畏れ、イメージを記憶する。

頭の中で『モナリザ』を構築するとき、フランス・パリにあるルーヴル美術館のダウン翼2階711号室にて額縁に収められている現物を再現する人はどれ程いるだろうか。世界中で『モナリザ』を知っている人間の母数からすれば、何かを媒介して『モナリザ』のイメージを受容しているケースが圧倒的に多数なはずである。（2025年現在、自身も現物を鑑賞したことがない。）

版画や写真を始めとする印刷技術やデジタルデバイスの発展に伴って流通する様々な媒体から情報の断片を編み上げており、ポストカードや画集、グッズ、インターネットなど、人によってそれは違うであろう。画集のインクの集積、電子画面上で見た光の点の集積は透明化され、遠くの地に存在するであろうオリジナルに意識と情報は接続されている。仮にその後人生のどこかで現物を鑑賞することがあれば、その存在を一切知らない状態で観る場合と違った鑑賞体験になることは確実ではないだろうか。「これがあの有名な」と思うこともそうである。アウラのヒエラルキーはオリジナルを頂点とするであろうが、認識の順序としてはインターネットで見た色相も彩度も違うガビガビのそれが先立っていれば、それが体験としてのオリジナルであること、それも『モナリザ』という本物の体験のひとつであることは変えられない。

更に言えば、その図像が様々な形で複製されているという事実そのものが鑑賞体験を変容させる。本来であれば視界のなかにひとつしか捉えられなかったであろうその図像がネット上の画像検索結果のように同時かつ高速かつ大量に反復できるようになった現象、それを違和感なく受容し「反復ネイティブ」とでも言えるような21世紀の我々が、本来の作品が制作された当初からすれば特殊な状態にあるように考えられる。そうして現代の社会上で振る舞う『モナリザ』という現象・概念の塊を想像したとき、はたして絵画現物のアウラはこれまで言及されてきたように「喪失・凋落している」と表現できるだろうか。特定の作品を引用・流用・盗用したあらゆる表現物は、その存在と認識の由来から元作品との情報の接続が発生する。そのとき引用先の表現物に発生する微弱なアウラは、引用元の存在を抜きにしては成立し得ないため「アウラを借りている」とも、「新しく立ち上がったアウラが先立つアウラにくっついた」とも表せる。アウラという社会集団上の合意形成は、実際には、変形・歪曲・融合を起こす蜘蛛の巣やアメーバ状のようなものとして想起できないだろうか。1911年に起こった有名な盗難事件や、マルセル・デュシャンがモナリザの絵葉書に落書きした『L.H.O.O.Q.』を1919年に発表した

こと、日本の例で言えば絵画材料店・世界堂が加工されたモナリザの図像をアイコンとして用いていることなど、暴力的にトリミングやレタッチをされたイメージが流通することや、その作品にまつわるあらゆるファクトは刻一刻と鑑賞体験を変質させ、来歴や社会的価値の総体をより複雑で大きなものにしていくのだ。それはある種の柔らかなさを持ち、膨大に包括されている鑑賞順序の相互関係をここでは「ずれ」と読んでいる。

### 「FLUID BABY」シリーズ

「FLUID BABY」は自身の制作において最初に立ち上がった、ポップと聖性についての取り組みである。19世紀フランス・アカデミズムの画家ウィリアム・アドルフ・ブグローの『天使の歌』を引用しており、正確にはインターネット上で見かけた『Study for Song of the Angels（天使の歌のための習作）』に登場する赤子のキリストを写している。習作というのは、作家自身が頭の中に想定している理想の図像を写し出す絵画の下書き、言わば写しの写しであり、画家の中のアイデアとタブロー、そして習作を並べた際に、現実への出力の順序関係が面白い。さらには、一般的にイメージされるブグローの精緻な描写からは想像しづらい簡素なタッチで描かれており、この習作がどこに収蔵されているのか、本人による制作であるか、実在するのかも、現時点では取調べておいていない。もし本人の仕事として実在しなかった場合に、いよいよ面白い倒錯が巻き起こると考えているからだ。アイコンックなモチーフであることも後押しし、「Repetition」シリーズと比較して物理的な絵画の要件（物的的にそれを絵画と呼べるかどうか）の狭間でアプローチを行うことが多い。ファッションアイテムやミュージアムグッズの流通に応答するような形で支持体の素材を綿やビニールに変更して不定形にする作品や、エルゴンとパレルゴンの関係性を取り込むものなど。たとえば、一度キャンバスに張った状態で内容を描画した後に木枠から剥がし、激しくシワが寄った状態で箱額に閉じ込めた『FLUID BABY\_03』は、服に印刷された古典絵画が街中で着られ、人の動きに伴って本来は固く静止しているはずの図像が目まぐるしく変形する様子からヒントを得ている。

### 「Repetition」シリーズ

「Repetition」はより広範な意味での反復を取り扱うシリーズである。引用したイメージを画面上で反復し形やリズムの面白さを再発見することで視覚的刺激を追求する作品もあれば、単一の作品内でイメージの反復は行わず、引用元の絵画に対しての反復であることの関係性にアプローチをかけ、構図やサイズについて言及する物もある。いずれも結果的には消費社会の中での古典絵画の挙動から示唆される鑑賞体験の「ずれ」を拾い上げ、鑑賞者に対して「ずれ」を発生させる装置として働いていて、これらの作品を観てから引用元の絵画を観たときに鑑賞者がオリジナルの画面に対して違和感を抱き始めるケースがあったり、引用元のタイトルをインターネット上で検索した際に「Repetition」シリーズの作品が表示されてしまう事例がある。こうなると「ずれ」の設計が成功していると言えるのではないだろうか。